

教育現場とのコラボレーション

1. 京都市立醍醐西小学校とのコラボレーション

(1) 2007年度の取り組み

教育実践コラボレーション・センターと京都市立醍醐西小学校とのかかわりは、2007年度より始まった。2007年度には、当時の石井英真センター助教と、醍醐西小学校の当時の副教頭であった畠田靖久先生を中心として連携が進められた。具体的には、研究授業と事後の研究協議会への参加、および日々の授業観察を中心とした共同研究を行ってきたほか、田中耕治教授（センター長）の講演を行った。

醍醐西小学校とのかかわりは、コラボレーション・センターの各ユニットを超えて、センター全体でそれぞれの分野の教員・院生の知見を文字通りコラボレートしようとする試みであることが特徴である。その出発点として、2008年2月20日（土）15時30分～16時30分（於：教育学部420室）には、畠田副教頭先生をお招きし、醍醐西小学校の子どもたちの様子、学力向上および学習意欲の向上、そして学びの環境づくりにおける教職員の努力・工夫、地域とのかかわりについてなど、具体的な資料をもとに、色々とお話いただく機会をもった。

当日は、センターにかかわる教員を中心として、各ユニットに関連する院生が参加し、学力向上の具体的な取り組みや「学力」のとらえ方について活発に議論したほか、子どもの「荒れ」に対する見方や地域の住民との連携をはかる具体的な方法の提案など、専門的な見方からの意見も交流することができた。

(2) 2008年度の取り組み

こうして始まった醍醐西小学校との取り組みであったが、2008年度にはセンター側と小学校側の双方の組織が変わったことによって、新たな関係づくりを始めることとなった。2008年12月には、田中耕治教授（センター長）と赤沢真世センター助教が算数の授業を見学し、子どもたちの様子を見せていただいたほか、学校全体の子どもたちの様子や先生方の取り組みについて、校長先生から具体的なお話を伺った。

2009年3月4日（水）15時00分～17時（於：教育学部420室）には、2007年度の畠田副教頭による講演を発展させる形で、2008年度の醍醐西小学校の取り組みや子どもたちの様子について、安藤昌之校長先生および研究主任の竹田敏宏先生をお招きし、講演していただく機会を持った。

学力向上における取り組みでは、単元や授業の終了時点での到達目標を明確にし、教師のみならず子どもにもその目標を意識させるという取り組みや、個々の子どもの学びの過程やそのペースに配慮した手立ての工夫などについて、2007年度よりもさらに具体的な取り組みをお話いただいた。また、地域や保護者との連携についても様々な試みを進めていることを具体的に

お話いただいた。

センターにかかわる教員や各ユニットに関連する院生などで構成された参加者からは、醍醐西小学校が全校で進めている到達目標を明確にした日々の授業づくりや細やかな手立ての工夫は、授業実践において極めて重要であるにもかかわらず、一般的にはなかなか浸透していない状況であるとしたうえで、醍醐西小学校が全校で一貫としてこうした授業づくりの柱を持って研究を進めていることは先進的であるとの意見等が出された。また、個々の子どもとのかかわり、あるいは保護者・地域とのかかわりのあり方についても、心理臨床や生涯教育を専門とする教員らから質疑応答が行われ、さらに発展させるための提案がなされた。このような意見交流からは、醍醐西小学校のこうした先進的な取り組みこそが、同様の課題を抱え、どのような具体的な対策を講じるべきかという課題を抱えている他の学校現場においても共有される必要性が浮き彫りとなった。

(3) 2009年度の取り組み

2009年度の取り組みは、大きく二つに分けられる。一つは、主に学力向上をめざした国語科の研究授業および研究協議会への参加である。参加者としては主に、学校教育改善ユニット（学力向上に向けた授業実践改善を中心に行うユニット）にかかわる教育方法学講座の院生・学部生、センター助教の赤沢真世助教に加え、生涯教育を専門とする吉田正純助教が参加させていた機会を持った。

これまで、学力向上に向けた授業づくりを主眼とするフィールドとのかかわりにおいては、教育方法学講座の教員・院生がかかわることが多かった。しかし今回、地域との連携や生涯学習としての学びを専門とする教員も参加し、同じ授業を異なる視点から観察し、意見を交流する場を持ったことの意義は大きいと考える。このように異なる立場が同時に同一の授業を参観し、協議会に参加する機会はまだまだ少ない現状では



▶シンポ「学校を問い直す」で報告される竹田先生

あるが、授業における教師の手立てや子どもの様子という次元はもちろんのこと、そこでの学びが子どもの生涯の学びにどう位置づくのか、あるいは教師の授業研究体制そのものが教師としての学びにどう位置づくのかといった視点からも、今後の交流や議論で深められることを期待したい。

2009年度における取り組みの二つ目は、センター企画シンポジウム「学校を問い直す」において、醍醐西小学校からは竹田研究主任に御登壇いただいたことである。2007年度、2008年度に当時の副教頭先生や校長先生、研究主任の先生方からお話いただいた醍醐西小学校の取り組みが、同様の課題を抱えて日々実践されている現場での取り組みとともに、参加者と共有される場となった。また、当日のシンポジウムでは、報告をいただいた後に、グループに分かれて大学教員や院生、そして醍醐西小学校の先生方で「交流会」としての時間をもち、様々な取り組みや先生方の思い、子どもたちの思い・願いなどについて、参加者との活発な議論や意見の交流が行われた。こうした報告・交流会を通して、参加者からは、現場での共通の課題を認識する一方で、醍醐西小学校の取り組みや先生方の姿勢から多くの示唆が得られたという意見も聞かれた。

今後は、各講座・ユニットを超えた教員や院生がそれぞれの専門性を生かして関わることでできる共同研究の組織づくりをさらに図り、具体的な取り組みを進めていきたい。

2. 第一回「命の授業」講演会 「金森俊朗先生を囲んで」

2008年8月2日（土）16時30分～18時30分（於教育学部420室）、元金沢市の小学校教諭で現在北陸学院大学教授の金森俊朗先生をお招きし、「命の授業」講演会を開催した。この会は金森先生ご自身に実践を分析的に語っていただき、金森実践の背景あるいは軸となる理論的な側面を浮き彫りにすることを目的とした。

金森先生は、アウシュビッツに向かう列車から母親に放り投げられたことで一生を救われた女の子が自らを語った本『エリカ 奇跡のいのち』という絵本を取り出した。そして「あなたが教師だったら、この絵本を教材として子どもにどう問いかけますか」と尋ねた。



▶絵本を示して語りかける金森先生

ある授業では、「この場面で君たちが母親だったら、子どもを投げますか？」という発問が行われたが、母親ならば苦渋の判断を要求される場面にもかかわらず、子どもたちは迷わず「投げる」と不慮即答したという。

こうした事例から、金森先生は、子どもたちが命の大切さを自らの体と自分史を通して把握していなければ、こうした優れた教材も子どもたちには響きにくいことを示された。ご自身の命の授業に貫かれているのは、「発せられる言葉が、体と人生史から生まれ、リアリズムに貫かれること」であるという。子どもたちそれぞれが向き合いながら、「生きててよかった」「生きてるあなたと生きてる私が大事にされている／されてる」というその実感を、毎日どうやって作るかということが、「いのちの教育」の根幹だと金森先生は語る。

また、金森先生は子どもたちにもものをいつでも縦軸と横軸で考えることを示しているという。縦軸は、歴史的・時間的なものの見方であり、横軸は世界的・空間的なものの見方である。このように、常に物事をこうした両面から捉え、徹底的に事実を追究し、事実を仲間に向かって発信し交流しあうという学びの方法を確実に身につけさせることが重要だとされた。また、神話論や民族主義に陥るのではないかと金森実践に対する批判も取り上げ、こうした学びの方法を重視することこそがこうした批判を乗り越える一つの解法となるのではないかとまとめられた。



▶質疑応答・交流の様子

参加者からは、ものの見方や教職のあり方などについて活発な質疑応答がなされた。金森実践の根幹をなす理論的な部分が語られたことで、参加者はメディアによって伝えられる実践をより深く捉える視点を得た。同時に、「言葉の居場所を失ってしまった今の日本の学校」と批判されたように、現代の日本の小学校教育を改めて問う必要性を強く感じる事ができた。

（文責：赤沢 真世）